

# 自己内カウンセリングを援用した対人援助職を 目指す大学生に対する教育実践 —事例検討とキャリア教育に焦点を当てて—

佐 瀬 竜 一

Education Practices of Applying Inner Counseling to Train  
Professionals for Human Communication in University:A Focus on  
Career Education with Case Studies

Ryuichi SASE

2017年8月28日受理

## 抄 録

対人援助を目指す学生には、これまで以上に柔軟で実践的な対応力が求められており、そのような学生への教育の在り方についても再考していく必要がある。本研究では、広い意味での対人援助職を目指す大学生を対象に授業中に自己内カウンセリングを行った実践について報告し、その効果について検証した。具体的には、自己内カウンセリングを取り入れて事例検討を試みた実践、大学生が自己の進路に向き合うために行ったキャリア支援の実践、という大学の授業内で実施した2つの実践について報告した。自由記述を分析した結果、いずれも一定の成果がみられたことから、自己内カウンセリングは対人援助職養成教育の中に取り入れることが可能で、かつ有効である可能性が示された。

キーワード：自己内カウンセリング、ロールレタリング、事例検討、対人援助職、  
キャリア教育

## 問題と目的

### 自己内カウンセリング

自己内カウンセリングは、原野（2002）によって考案された、ロールレタリングから派生した技法である。自己内カウンセリングは、理想の相談相手を想像し、その相談相手と自分（クライアント）の役割交替を交互に行いながらドラマの脚本を書くように悩みなどを相談する、対話の形式をとって用紙に書き進めていく方法である。

自己内カウンセリングとロールレタリングは、特定の他者を想定し、その人物になりきってやりとりをするという点で類似している。

しかし、ロールレタリングと自己内カウンセリングは異なる点もある。ロールレタリングが、手紙の受取り手である想定する他者の候補が、葛藤のある相手や「自分をやさしく理解しあたたかく支えてくれた人」、親や教師、将来の自分など幅広いのに対し、自己内カウンセリングは理想の相談相手と想定する相手に関する教示が特定されているという点が異なっている。また、ロールレタリングが手紙のやりとりをするというスタイルをとるのに対して、自己内カウンセリングはドラマの脚本のように随時役割を交替して行うというように、形式も異なっている。

自己内カウンセリングは、葛藤のカタルシス、問題点の整理、自尊感情や現実検討能力の向上、認知の歪みの修正、悩みの解決といった効果が期待できる（原野,2007）。自己内カウンセリングは、誰に書いたらよいか迷うもしくは思いつかない、自尊感情が低いために複数の立場から自分をみつめる作業をロールレタリングより緩やかに行うことが必要な場合などに特に適していると考えられる。

自己内カウンセリングもロールレタリングと同様に書く内容を自由に設定できる、集団で一斉に1回60分程度で行うことができるという特徴があることから、様々な用途で大学生の支援や教育に活用できる技法であると考えられる。佐瀬（2014a・2015）は、大学生を対象に集団でロールレタリングを行うことで、「感情の安定・整理」、「自己表現」、「気づき・自己発見」、「肯定的思考」という4種類の効果が得られること、さらには条件次第では人とのつながりへの気づき、他者の視点への気づきなどの効果が得られる可能性があることを示し、ロールレタリングは、適応支援、健康支援、学習支援、進路支援などの目的で大学生の支援や教育に幅広く活用できる可能性があることを示している。自己内カウンセリングについても類似の効果が期待出来るが、自己内カウンセリングに関する研究は少なく、実践報告や実証的研究の蓄積が求められる。さらに、中嶋・山本（2007）が指摘しているようにロールレタリングはこれまで小学生や中学生を対象に行われた研究が多く、大学生を対象にしたロールレタリングの研究は少ない。自己内カウンセリングについても同様のことがいえる。

また、人間関係が複雑化する今日において、教育・医療・福祉・心理等の対人援助職に従事する者、また目指す者には、今まで以上に多様な事例に対して柔軟でかつ質の高い対応が可能な人材になることが求められるようになってきている（岡島,2002）。このことは、対人援助の専門職を目指す学生でなくても、サービス業が主体となっている今日の産業構造の中では誰にでも例外なく必要となってくる。上記のような柔軟で実践的な対応力を身につけるには、実習や実践が不可欠である。しかし、いきなり現場で実習や体験を行うことが難しいという現実的問題も存在する。したがって、対人援助を目指す学生への教育の在り方については様々な角度から議論し、検討、実践していく必要があると思われる。その実践の1つとして、対人援助職養成教育の中に心理劇の役割交換技法を取り入れた重橋・岡嶋（2006）を挙げることができる。二者が自分の立場を離れて対演者の立場を演じることで、保育学生が自己・役割・人間関

係に対する気づきを得ることを報告している。自己内カウンセリングも、一人2役を演じる役割交換の要素を含むため、心理劇の役割交換技法と同様に対人援助職養成教育の中に取り入れて、教育の質向上に寄与することができるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、広い意味での対人援助職を目指す大学生を対象に授業中に自己内カウンセリングを行った実践について報告し、その効果について検討する。具体的には、事例検討をより効果的に行うために自己内カウンセリングを行った授業実践、大学生が自己の進路に向き合うために行ったキャリア支援としての授業実践2つについて報告する。結果を踏まえて、自己内カウンセリングの効果や活用可能性について考察する。

## 実践1：事例検討をより効果的に行うために自己内カウンセリングを行った授業実践

### 事例検討と対人援助者を目指す学生への教育

事例検討とは、「複数の援助者が集まり、援助の経過、問題点、援助の進め方などを集団で討議する1つの機会」（尾崎,1992）と定義される。援助者が事例の中で抱える疑問や困りごとについて他者の意見や助言を聞くことがこの方法の出発である。しかし、最近では、援助者（を志そうとする者）の援助力の質を上げることを目的として看護・福祉・心理・医療・教育といった対人援助職を目指す者への教育手段として用いられることも多い。加えて、近年の現場からの要請に合わせて対人援助職の教育・養成機関では専門的な知識や技術を実践的に習得させることが求められている。したがって、対人援助者への教育における事例検討の役割はさらに大きくなっていくものと思われる。

### 事例検討の課題

しかし、事例検討の在り方、進め方については十分に検討されているとは言いがたい。したがって、事例検討の内容や成果が司会進行役（ファシリテーター）の力量や価値観に必要以上に左右される、事例検討での論点や意見が整理されないまま事例検討が終了になる、問題やその対応ばかりに目がいきやすく援助者とクライアントの関係性について検討しにくいなどの問題が生じている（森,2001）。対人援助者の教育に事例検討を取り入れて、教育的効果を持たせるためにはこれらの点について対応することが必要であろう。

### 自己内カウンセリングの手法を援用した事例検討の考案と実践

筆者は、先述の事例検討における課題に対応するための1つの方法として、自己内カウンセリングを活用することができるのではないかと考えた。検討すべき事例場面を用いて、相談者と援助者の役割交替を交互に行いながらドラマの脚本を書くように悩みを相談する自己内カウンセリングを行うことで事例の背景を丁寧に振り返ること

が可能になると思われる。浮田（2011）は、ロールプレイを事例検討の中に取り入れることの有効性を主張している。したがって、1人2役を演じるロールプレイの要素を含む自己内カウンセリングを事例検討の中に取り入れることで事例検討をより有意義に行うことが期待できる。また、理想の相談相手を想像する自己内カウンセリングは、より安全にかつ客観的に事例を振り返ることを可能にする方法になると思われる。大人数の授業の中で事例検討を行う場合は、特に安全面などへの配慮が求められるため、自己内カウンセリングを事例検討に取り入れることは意義があると考えられる。

そこで以下では、対人援助者の教育の中で行う事例検討に、より教育効果を持たせることを意図して自己内カウンセリングの手法を援用して事例検討を行った授業実践について報告する。

対象となる授業は大学4年生対象の教育相談（初等）で、受講者65名で教職希望者が受講者の大半を占めている。自己内カウンセリングの実施時期は2016年1月であった。

具体的な手順として、まず途中まで書かれた逐語録を配布し、黙読するように求めた。逐語録については、高良（2014）を参考にし、中学1年の息子の登校しぶりに悩む母親が学級担任に相談するという事例の逐語録を用意した。黙読後に、4人グループで感想を共有するように求めた。

次に、理想の聴き手（学級担任）をイメージするように求めた。具体的には、「理想の聴き手（担任）を想像してください。そしてその特徴（性別・年齢・人柄など）を詳しく四角の枠の中に書いてください（文章、箇条書き、単語、イラスト、マーク可）」と教示した。記入後に、理想の聴き手について書いた内容の中で他者に話してもよい範囲のみを口頭にてグループ内で共有するように求めた。

その後、イメージした理想の聴き手（学級担任）になったつもりで、母親と紙面上で約20分交互に対話するように教示した。表情・様子や感情は括弧で書くようにも求めた。記入後に、書いた内容の中で他者に話してもよい範囲のみを口頭にてグループ内で共有するように求めた。

その後、事例の逐語録の続きを配布し、黙読するように求めた。自分が書いた自己内カウンセリングと比較・検討して気づいたことなどをグループ内で共有するように求めた。最後に実施しての感想を記入して終了とした。

受講生の感想については、KJ法を援用して分析・集計を行った（表1）。

表1 自己内カウンセリングに取り組んでみての感想の集計結果（実践1）

自由記述	回答数
ラポールの形成の重要さ・難しさに気づいた	16
自分のクセに気づいた	11
まず何をすべきかをじっくり考えることができた	7
授業で学んだスキルが身につけていないことを実感した	4
自分がこれと同じ事ができるのか不安になった	4
どうしたら母親の気持ちを引き出せるかすごく悩んだ	3
共感とは何かがよくイメージできた	3
メンバー間で母親像、聴き手像が違っていたのがおもしろかった	2
感謝の姿勢が大切と感じた	2
暗い気持ちにならずに考えることができた	2
まず子どもの様子を伝えることが母親に必要と思った	1
一言や相手を尊重する言葉の大切さに気づいた	1

その結果、聴き手（担任）と話し手（母親）の関係性やラポールの重要性に言及している記述が多くみられた。また、聴き手の一言が持つ影響力の大きさに気づいたとの記述もみられた。これらのことから、自己内カウンセリングの手法を援用した事例検討は、これまでの事例検討よりも援助者とクライアントの関係性をより丁寧に見つめることができる方法であると考えられる。

また、自分で書いた紙が手元にあることで共有や話し合いがしやすいとの感想もみられた。事例検討は、進め方によっては事例報告者と司会者、そして一部の発言者のみが参加し、それ以外の者は傍観者となってしまう場合もある。小グループの話し合いを取り入れても、報告者と同じ立場に立って考えることは難しく、評論家のような立場になって終わるといった可能性もある。自己内カウンセリングの手法を援用した事例検討は、参加者全員が紙面上で報告者と同じ立場を経験することができるため、より有意義な事例検討が可能になることが期待できる。

## 実践2：進路に向き合う自己内カウンセリングを取り入れたキャリア支援

大学生を対象にしたキャリア支援における工夫の必要性

近年、大学におけるキャリア教育の義務化に伴い、様々な実践が行われている。ロールレタリングは初等・中等教育の分野では進路指導の1つの手法として用いられている。一方、大学をはじめとした高等教育における進路支援について考える場合、就職活動の問題は避けて通ることはできない。近年の就職活動は一般的に3回生の後期から始まることが多い。活動の過程はとてもストレスフルなものである一方で、ストレス耐性が低い傾向にある近年の学生にはより困難を伴う場合も多く、進路が決まらない学生も一定数存在する。したがって、様々なキャリア教育が各大学で試みられている。



キャリア教育の中でも自己分析の重要性が指摘されている（石橋,2012）。さらに、森重・浦田（2008）は、対人援助に従事する者に必要な要素の1つとして自己評価を挙げ、自己の援助過程を振り返り、自分自身を洞察・理解する力を育成する教育が対人援助養成教育の中でこれまで以上に求められることを指摘している。したがって、対人援助養成教育の中では自己分析をどのような方法でどのように行って自己を分析する力を育成していくのが良いのかについて検討していく必要があるといえる。

実際、今日では対人援助養成教育の場におけるキャリア支援の中で自己分析に関する様々な個人ワークやグループワークが行われている。しかし、心理的問題や課題を抱えている学生も増えており、いきなり自己に向き合う、自己を個人もしくは集団で分析していくことが難しい場合も存在する。加えて、コミュニケーション力（特に対人関係能力）の低下によって自ら友達を作ることが難しく孤立する学生が増えている、一見対人関係が健全であると思われる学生も実際の関係が希薄で表面的なものであることが多いことが指摘されていることから（宮下・杉村,2008）、グループワークを行っても成果を挙げるができない場合があることが指摘されている（深津,2013）。したがって、事前になんらかの準備や工夫が必要であり、またそのような準備や工夫を行うことによって自己分析の効果をより高めてキャリア支援を有意義なものにすることができると考えられる。

#### 自己内カウンセリングの手法を援用して行ったキャリア支援の考案と実践

自己分析の効果をより高めてキャリア支援を有意義なものにするための準備や工夫の1つとしてロールレタリングを挙げることができる。中嶋・山本（2007）は、「就職後の自分」に手紙を書くロールレタリングを大学生に行い、進路への意識が向上したことを報告している。岡本（2006）も、カウンセラーを目指す学生が自己理解を短時間で深める方法としてロールレタリングを活用できることを示している。佐瀬（2016）は、大学生に授業中に進路をテーマに行ったロールレタリング、具体的には「重要な他者」と「10年後の自分」を対象にロールレタリングを行った実践を報告し、ロールレタリングが、大学生にとって効果的で安全なキャリア支援の1つの方法として活用できる可能性を示唆している。また、佐瀬（2014b）は受容的な人物に自己の人生を振り返る、語るロールレタリングが本格的な自己分析の準備段階の活動として利用可能であることを示している。

さらに、誰に書いたらよいのか迷うもしくは思いつかない、自尊感情が低いために複数の立場から自分を見つめる作業をロールレタリングより緩やかに行うことが必要な場合などに特に適している自己内カウンセリングは、より安全にかつ客観的に自己の進路に向き合うことを可能にする方法になることが期待出来る。大人数の授業の中でキャリア支援を行う場合は、事例検討の場合と同様に、安全面などへの配慮が個人ワークの時以上に求められるため、自己内カウンセリングを取り入れることは意義があると考えられる。

そこで以下では対人援助養成教育におけるキャリア支援の中で、より教育的効果を

持たせることを意図して自己内カウンセリングの手法を援用してキャリアについての自己分析を行った授業実践について報告する。

対象となる授業は大学2年生対象の生涯心理学で、受講者63名で進路について特定の方向性を定めきれていない学生が受講者の大半を占めている。この授業では、「誕生から死までの心の発達の様相に関する知識を得て、現在から未来の自己を客観的に分析する」ことを目的としている。自己内カウンセリングの実施時期は2016年10月であった。

また、今回の実践では自分の進路の悩みにいきなり取り組むのは負荷が高いと考えて、進路不決断傾向の強い架空の人物を3種類用意して、書きやすい者を選択し、選択した者の悩みについて考えるという方式を採用した。

具体的な手順として、柏川・木村(2009)を参考に進路不決断傾向の強い架空の人物を3種類用意し(表2)、その内容が書かれた紙を配布し、黙読するように求めた。

表2 本実践で用意した進路不決断傾向の強い人物3名の内容

---

相談者Aさん(大学2年生)

私は、社会人として働くことが実感できません。来年には就職活動をしていくのに仕事の種類や自分がどんな仕事に向くかも分かりません。これから来年に向けて何からどう始めたらいいのでしょうか。

相談者Bさん(大学2年生)

受験勉強を頑張って第一希望はダメだったのですが、第二希望の大学に進学しました。今では、遅刻したり、講義を休んでしまったりして、最近授業を受ける意欲がなくなってしまいました。ましてや将来のことなんて考える気にもなりません。

相談者Cさん(大学2年生)

私は、将来の夢が決まっています、その夢に向かって必要な授業を履修しています。でも、最近の自分の夢が正しいのか、自分がやりたいことは他にあるのではないのか、自分はその仕事に向いていないのではないのかと思うようになってしまい、混乱しています。

---

その後、「あなたが進路アドバイザーとして、A～Cさんの誰か一人の相談に応じないといけないとしたら、誰の相談に応じますか」と教示して、1人を選択するように求めた。選択後に、4人グループで感想を共有するように求めた。

次に、理想の聴き手(進路アドバイザー)をイメージするように求めた。具体的には、「理想の聴き手(進路アドバイザー)を想像してください。そしてその特徴(性別・年齢・人柄など)を詳しく四角の枠の中に書いてください(文章、箇条書き、単語、イラスト、マーク可)」と教示した。記入後に、理想の聴き手について書いた内容の中で他者に話してもよい範囲のみを口頭にてグループ内で共有するように求めた。

その後、イメージ理想の聴き手(進路アドバイザー)になったつもりで、A～C

さんの中の選んだ1人と紙面上で約20分交互に対話するように教示した。表情・様子や感情は括弧で書くようにも求めた。記入後に、書いた内容の中で他者に話してもよい範囲のみを口頭にてグループ内で共有するように求めた。最後に実施しての感想を記入して終了とした。

受講生の感想についてKJ法を援用して分析・集計を行った(表3)

表3 自己内カウンセリングに取り組んでみての感想の集計結果(実践2)

自由記述	回答数
自己の心理状態に気づいた	15
意欲が向上し、未来へ意識が向いた	14
自己が反映していることに気づいた、驚いた	13
自己の整理・客観視できた	8
文字、書くことのやりやすさを実感した	4
自分の現状への焦りを感じた	3
意図的に自分と真逆の人を選んでみた	3
理想の聴き手がどんな人が気がついた	2
対話の感覚を実感した	2
頼る、頼られることの大切さを実感した	1
相談者の選択の仕方に違いがあって驚いた	1
投影しすぎて解決策がうかばず困った	1

その結果、「自分も意外と悩んでいることに気がついた」「実は何を思っているか、どうしたいかが紙を通して伝わってきたような気がした」というような自己の心理状態への気づきに関する記述が多くみられた。文字に書き起こして外在化することで自己の内面に気がつきやすくなる効果、また想像の中ではあるが対話の形式を取ることによって得られる対面のカウンセリングと類似の気づきの効果がこのような結果に関係していると考えられる。また、「模索し始めようと前向きになれた」「がむしゃらに頑張りたいと思った」などのような意欲向上や未来へより意識が向いた記述も多く見受けられた。上記の効果に加えて、理想の相手を想定すること、理想の相手に相談したらどう変わっているのかについて考えることで視点が肯定的な未来志向に向くことが今回の結果に関係していると思われる。さらに、「気がつかないうちに自分のことが反映されていることに驚いた」「自分の悩みがそのまま反映されている気がした」「今の自分が反映されていると思った」など、自己の心理が選択した相談者に投影していることへの気づきや驚きも多く報告された。進路不決断傾向の強い架空の人物3種類が、いずれも大学生がイメージしやすい人物像であったことから、自己を投影しやすかったものと思われる。そして、一部の者については自己の心理状態に気づくだけでなく、自己の整理や客観視までできたと記述していた。どのような場合に1回の自己内カウンセリングでこのような手応えを感じることができるのかについては今後検討する必要があるが、条件次第では1回の実施でも自己の整理や客観視につながる可能性がある



るといえる。

これらのことから、自己内カウンセリングの手法を援用してキャリアについての自己分析を行う方法は、自己の進路に関する悩みや思考に気がつき、進路関連行動への意欲を高めるために活用できるといえる。したがって、より本格的な自己分析の準備段階の活動として自己内カウンセリングを用いることは可能であり、効果的であると考えられる。

加えて、今回の実践では自分の進路の悩みにいきなり取り組むのは負荷が高いと考えて、進路不決断傾向の強い架空の人物を3種類用意して、書きやすい者を選択し、選択した者の悩みについて考えるという方式を採用した。自由記述の分析の結果、自己が反映しているという内容の記述が多かったことから、自分の進路について直接向き合っているわけではないにもかかわらず、書き手本人が自己を意識的にもしくは無意識に相談者に投影する形で、自己について振り返る・向き合うことが可能であることが示唆された。架空の人物の設定方法については今後慎重に検証する必要があるが、今回の実践のような形式は安全にかつ段階的に自己内カウンセリングを導入していくための1つの方法として活用できる可能性がある。

### 総合的考察

本研究では、広い意味での対人援助職を目指す大学生を対象に授業中に自己内カウンセリングを行った実践について報告し、その効果について検証した。具体的には、事例検討をより効果的に行うために自己内カウンセリングを行った授業実践、大学生が自己の進路に向き合うために自己内カウンセリングを行ったキャリア支援の2つの実践について報告した。いずれも、一定の成果がみられ、自己内カウンセリングを対人援助職養成教育の中に取り入れることが可能で、かつ有効である可能性が示された。

1人2役、複数の役割を担う、演じるロールレタリングや自己内カウンセリングは自己の多面性や複雑性、役割取得能力を段階的に高める、引き出すことができる方法であると考えられる。さらに、他の技法と異なるのは、書き手自身によって自己の多面性や複雑性、役割取得能力を高めていくという点にあり、ロールレタリングや自己内カウンセリングは自己の多様性や可能性を書き手自身の手で引き出す方法といえる。自他の多面性・複雑性、多様な役割への気づきや一定の配慮は、対人援助の場では欠かせない。加えて、今後ますますの多様化・国際化が予想される社会においてもこのような配慮は必要不可欠であり、ロールレタリングや自己内カウンセリングは社会で生きていくために必要な力を身につけるためにも有効な方法になることが期待される。そのためにも今後の更なる実践報告や実証的研究の蓄積が求められる。

本研究で報告した実践はあくまで試験的な試みであり、今後さらなる検討の余地が残されている。実践や研究を積み重ねることで、より望ましい在り方について多角的に検討していきたい。

## 引用文献

- 深津達也 (2013). 「協同学習」を取り入れた大学教職授業の成果と課題 研究紀要, 10,121-133.
- 原野義一 (2002). ロールレタリングにおける新しい技法の試み  
—自己内カウンセリング— ロールレタリング研究,2,61-69.
- 原野義一 (2007). ロールレタリングを用いた自己内カウンセリング  
松岡洋一・小林剛 (編). ロールレタリング—役割交換書簡法— 現代のエスプリ 482 至文堂 Pp186-194.
- 石橋里美 (2012). キャリア開発の産業組織心理学ワークブック ナカニシヤ出版.
- 重橋のぞみ・岡嶋一郎 (2006). 対人援助職養成における心理劇の役割交換技法に関する研究：保育学生の自己・役割・人間関係に対する気づきを通して  
福岡女学院大学大学院紀要：臨床心理学,3,39-46.
- 柏川正光・木村栄宏 (2009). 職業的進路不決断傾向の測定による大学生のキャリア意識類型化の試み 千葉科学大学紀要,2,25-31.
- 宮下一博・杉村和美 (2008). 大学生の自己分析—いまだ見えぬアイデンティティに突然気づくために— ナカニシヤ出版.
- 森 恭子 (2001). 援助関係を基盤とした事例検討（研究）会の進め方についての一考察—社会福祉現場実習後の援助場面の事例を中心に— 富山福祉短期大学紀要（福祉研究論集）,3,29-38.
- 森重 功・浦田 雅 (2007). 対人援助職にとっての自己理解について—心理臨床場面における自己理解の一過程から— 奈良佐保短期大学研究紀要,15,87-92.
- 中嶋 渥・山本眞利子 (2007). 「就職後の自分」を用いたロールレタリングが大学生の進路不決断と自尊感情に及ぼす影響 久留米大学心理学研究,6,75-79.
- 岡嶋一郎 (2002). 心理臨床家養成課程における心理劇実習の意義について  
—心理劇の五要素に基づく検討— 長崎純心大学心理教育相談センター紀要,1, 39-48.
- 岡本茂樹 (2006). 自己分析の方法としてのロールレタリング—カウンセラーを目指す学生の自己意識の変化— 交流分析研究,31,103-112.
- 尾崎 新 (1992). 社会福祉援助技術演習 誠信書房.
- 佐瀬竜一 (2014a). 大学教育におけるロールレタリングの可能性 常葉大学教育学部紀要,34,1-17.
- 佐瀬竜一 (2014b). 大学生における自分史作成のきっかけ作りとしてのロールレタリングの導入 大学教育学会第36回大会発表要旨集録,118-119.
- 佐瀬竜一 (2015). ロールレタリングが大学生の心理状態に及ぼす影響—内省報告の分析を通して— 常葉大学教育学部紀要,35,73-84.
- 佐瀬竜一 (2016). ロールレタリングを用いた大学生を対象にしたキャリア教育の試み 常葉大学教育学部紀要,36,201-212.

高良麻子(2014). 保護者との面談ーソーシャルワークの活用法3ー

高良麻子・佐々木千里・鈴木庸裕(編). 子どもが笑顔になるスクールソーシャルワーク かもがわ出版 Pp54-62.

浮田徹嗣(2011). ロール・プレイングを用いた援助職のための事例検討についてー精神分析的視点からー 横浜市立大学論叢人文科学系列,62,67-83.

